

つながる糸

「この町の伝統を、文化を守りたい」
 「この人たちのために何かできることを」
 「いつか古里に戻る日まで」
 いろいろな想いで、人と人がつながる。
 人と人とのつながりには、想像を超える力がある。
 そのつながりを大切に育てるように、糸を紡いでいこう。
 お互いに寄り添い、助け合いながら、
 共に歩いていくために

継つぐ



「おシンさんの嫁入り保存会」設立総会の様子

おシンさんの嫁入り

本町の昭和初期の祝言(結婚式)儀式を忠実に再現する「おシンさんの嫁入り」は6月11日、亀ヶ城公園周辺で開催された。2年ぶりの開催となった今年の行列は、あいにくの空模様となったが、小雨が降る中、多くの観客が訪れた。嫁入り行列は、花火の合図で町むかし体験館を出発。長持ち歌を唄いながら亀ヶ城公園の中を練り歩き、中央部分で「受け取り渡し」の儀式を執り行った。その後、学びいなに場所を移して結婚式にあたる「結び」の儀式を再現。男蝶、女蝶と呼ばれ

嫁入り復活に向けて

多くの観客が訪れ、大成功となったおシンさんの嫁入りだが、開催まで順風満帆というわけではなかった。13回目となるはずだった昨年は、事務局を務める団体がなくなり、中止となってしまったのだ。「町の伝統を受け継いでいくためにもこのイベントをなくしてはならない」町民有志が立ちあがり昨年11月、本間昌儀さんを会長に、お

おシンさんの嫁入り実行委員会
本間 昌儀
 実行委員長



Honma Masayoshi

東日本大震災の直後は、イベントを実施していいものか悩んだが、猪苗代の元気な姿をアピールすること、やれることを一生懸命やることで復興に寄与したいと思った。イベントをやって本当によかったと思う。一度は途絶えかけたが、自分たちが守り、継承できた伝統をこれからも大切にしていきたい。

受け継がれた伝統

今回のおシンさんの嫁入りでは、伝統文化の継承のため、配役にも工夫を凝らした。このイベントのモデルとなった渡部シンさんが結婚したのは18歳。それならば、若い世代に参加してもらおうと猪苗代高校の生徒に出演を依頼した。主役の花嫁と花婿を務めたのは、いずれも3年生の後藤あやめさん(17)と関一稀さん(18)。観客からは「初々しくていいね」「かわいい」と歓声が上がった。2人を見るために、同級生たちも駆け付けた。

震災後、本町に避難している人たちに、この町の伝統文化に触れてもらおう、楽しんでもらおうと参加者を募集した。荷背負い役として参加した浪江町の小松哲さん(68)は、「本番もいいが、リハーサルや練習などで皆さんと話すのが楽しかった」と感想を述べた。町民が自ら立ちあがり、気持ち、動き出した。世代を超えた縦の糸のつながりや地域を超えた横の糸のつながりが、イベントを成功に導いた。地域の伝統・文化を継承していくことに必要なもの。それは、おシンさんの嫁入りというイベントそのものの中にある。



写真左 小雨が降る中、亀ヶ城公園を進む嫁入り行列を、多くの観客が取り囲んだ

写真上 学びいなしでは結びの儀式が再現された

出演者から一言



花婿役 関一稀さん

最初はすごく緊張したが、終わってほっとした。明日は顔が筋肉痛になりそう。町の伝統に触れることができて良かった。



花嫁役 後藤あやめさん

着物は苦しかったけど、何とか慣れました。たくさんのカメラを向けられて、どんな顔をしていいかわからなかったけど、楽しかった。



仲人役 佐藤町子さん

男蝶を務めた孫と一緒に出演できて、いい思い出になりました。町外から来た友だちも楽しんでくれてよかったです。



荷背負い役 小松哲さん

長持ち歌の節回しが浪江とは違うので戸惑いました。本番も楽しかったが、リハーサルで皆さんと話しているのも楽しかった。

Voice



写真左から 小林乃里子さん、渡部千乃子さん、南雲ひろみさん

F Mで開催を知り、友人と見に来ました。(小林さん) わたしの婚礼はこんな感じでした。(渡部さん)



佐藤 久雄さん シゲ子さん

このイベントは毎年楽しみにしていた。今年は復活してくれたことと、大勢の人が見に来てくれたことがうれしかった。ずっと続けてほしい。



写真左 小学生未満の子どもたちによるちびっこみこし
 写真上 中の沢保育所の園児らによる白虎隊剣舞
 写真下 700食を振る舞ったなみえ焼きそばには長い行列ができた
 写真右 温泉祭りのメインイベントの一つ、温泉踊り。地区住民と避難者が一体となって踊った



縁 【えん】

この人たちのために何かできることはないか。7月に開催していた祭りを、6月に開いた。何でもいいから手伝いをしたいと思った。ここで出会ったのは、何かの縁。見えない糸に引き寄せられるように、お互いを思いやる気持ちが今、重なり合った。

日本でも有数の単一口源泉湧出量を誇る本町の中ノ沢・沼尻温泉。その温泉祭りは6月18日、中ノ沢温泉街で開かれた。中ノ沢温泉神社での祭礼後、吾妻小学校の児童による鼓笛隊パレードやなみえ焼きそばの振る舞い、中ノ沢保育所園児による白虎隊剣舞やちびっこみこしなどを繰り広げた。当日は温泉も無料開放された。夜は、温泉流し踊りで温泉街を練り歩き、広場で輪を作って踊るなど、終日、多くの観客でにぎわった。

お互いを思いやる

3月に発生した東日本大震災の影響で、現在、中ノ沢地区の温泉旅館には、200人以上の浪江町民が避難している。温泉祭り実行委員会のメンバーは、この人たちのために何かできることはないだろうかと話し合った。そして、「祭りをきっかけに少しでも元気になってほしい、笑顔を取り戻してほしい」と、例年7月に開催される祭りを、1カ月早めることを思いついた。

1カ月早い温泉祭りの開催に向け、準備は進んだ。少しでも体を動かす機会にと、祭りの手伝いを募集したところ、延べ100人以上の人が事前準備や

後片付けに協力してくれた。浪江町民も、中ノ沢地区のために何か協力したいと思っていた。お互いがお互いのためを思う気持ちが、そこにはあった。その気持ちは、当日の会場にもあふれていた。浪江焼きそばの店には、長い行列ができた。旅館の法被を着て、温泉踊りの輪の中に入る人も大勢いた。踊りの最後には、温泉祭り実行委員会からのサプライズ演出があった。浪江町民が古里で踊れなかった相馬盆唄が流れ出すと会場は騒然。会場が一体となって相馬盆唄を踊り、祭りを締めくくった。

Voice

浪江名物なみえ焼きそばを振る舞った

井戸川 正伸さん(58)



地元を懐かしんでくる人たちのためにボランティアで参加した。イベントなどに参加することで、人に会えるし、新しいつながりも生まれる。なみえ焼きそばを食べて、浪江を懐かしんで、元気を出してもらいたい。

浪江町から避難 祭りを手伝った

青田 幸栄さん(78) 幸子さん(68)



一次避難所で生活を始めてすぐ、みんなの元気のために働こうと食事づくりの手伝いを始めた。多いときには、約500人分の食事づくりを指揮し、その活動は、新聞にも取り上げられた。新聞を見て、わざわざ避難所を訪ねて来てくれた人も

いた。うれしかった。そのときに感じたのが、やはり人とのつながりは財産だということ。イベントは、散り散りに避難していた人たちが集まるいい機会。私も今まで会えなかった人に会えた。避難者の中には、孤独を感じながら生活している人も大勢いる。そういう人たちのためにも、これからも自分にできる範囲で人の手伝いをしていきたい。



温泉祭り
実行委員会

氏家 利晃
実行委員長

Ujii Toshiaki

中ノ沢に避難している浪江町の人たちが、少しでも早く笑顔を取り戻してくれたら。私たちはそう考えて、毎年7月末に開催している温泉祭りを1カ月早く開催した。

何人が手伝いに来てくれればというくらい、軽い気持ちで準備に参加してくれる人を募ると、100人以上の人たちが集まってくれた。浪江の人たちも、この地区のために何かできることはないかと思って来ていた。

お互いがお互いのためを思って行動した。その結果が、昨年と比べて2倍以上の人出と盛り上がりにつながった。

参加した人から「気晴らしになった」「久しぶりに楽しかった」「来年も参加したい」と言われて、本当にうれしかった。

全員で協力し合いながら、猪苗代で合宿生活を送る



猪苗代中学校
富岡第一中学校バドミントン部



チームが一丸となって8月の全中制覇を目指す

逆境に負けず目指すは全国制覇



男子主将
古賀 穂さん(3年)



顧問
齋藤 巨教諭(39)

富岡町でも寮生活を送っていたが、これだけ長い時間一緒にいると、みんなを取りまとめるのが大変なときもある。しかし、集団行動の中で、知らず知らずのうちにチームワークが良くなっている部分もあると思う。いつもと違う環境の中でも、頑張っ練習してきた。この仲間とともに8月の全中の優勝を目指したい。(古賀さん)

中学生が2カ月以上も4〜6人部屋で生活を続けている。厳しいときもあると思うがよく頑張っていると感心している。(齋藤さん)

東日本大震災と福島第一原発事故という未曾有の大災害の前に、私たち一人一人はあまりにも無力だ。だからこそ、家族、地域や仲間と助け合い、支え合わなければならぬ。

災害から立ち直った人も、立ち直れない人もいる。復興への社会的な機運が高まるにつれ、災害から立ち直れない被災者は、孤立感を強めていく。

お互いに寄り添い、支え合いながら共に歩み、まずは心の復興を目指すことが必要だ。

【むすぶ】 結

私たちは家族や地域と結び付いているだろうか。つながっているだろうか。自分と地域とを結ぶ糸を手繰り寄せてみよう。地域や人とのつながりを、結びつきを大切にすること。それが心の復興への足がかりになる。

この町で避難生活を送る人たちもまた、家族、地域や仲間と共に支え合って暮らしている。日々の生活や活動を通して、地域のつながりを、人との結びつきを大切にしている皆さんを紹介する。

地域のつながりを大事にしたい



館内の清掃は当番制。住民全員が交代で毎日清掃を実施する

ホテル内の清掃活動や地区の見回りなどで、地域のつながりを守る



志賀三男 副区長(53)
(飯館村蕨平地区)

飯館村の蕨平地区は、福島第一原発から30km圏内に位置し、計画的避難区域に指定された。地区の住民約140人のうち、半数近くが現在もホテルプルミエール箕輪で避難生活を送っている。

自分たちが生活するホテルの清掃や地区の空き巣被害を防ぐ見回り活動など、一緒に行動することを通して、地域で心をつなぐ。この難局を乗り越えようと思っている。

二次避難先はどこになるか分からないが、それぞれの仕事などの都合もあり、地区住民がまとまって移動するのは難しいというのが現状だ。

しかし、こんなときだからこそ、地域のつながりを無くしてはならないと思う。借り上げアパートや仮設住宅など、これから離れ離れになっても、お互いに連絡を取っていききたいと話している。

ホテル内のハーブ園で除草や苗育てのボランティア活動をする



佐々木 章さん(57) 孝子さん(60)
(双葉町山田地区)



ハーブ園のバラの剪定作業をする佐々木さん夫妻

震災後は新潟県のアパートで生活していたが、まったく情報が入ってこなかった。知り合いもおらず、やることもない日々で苦痛を感じていた。

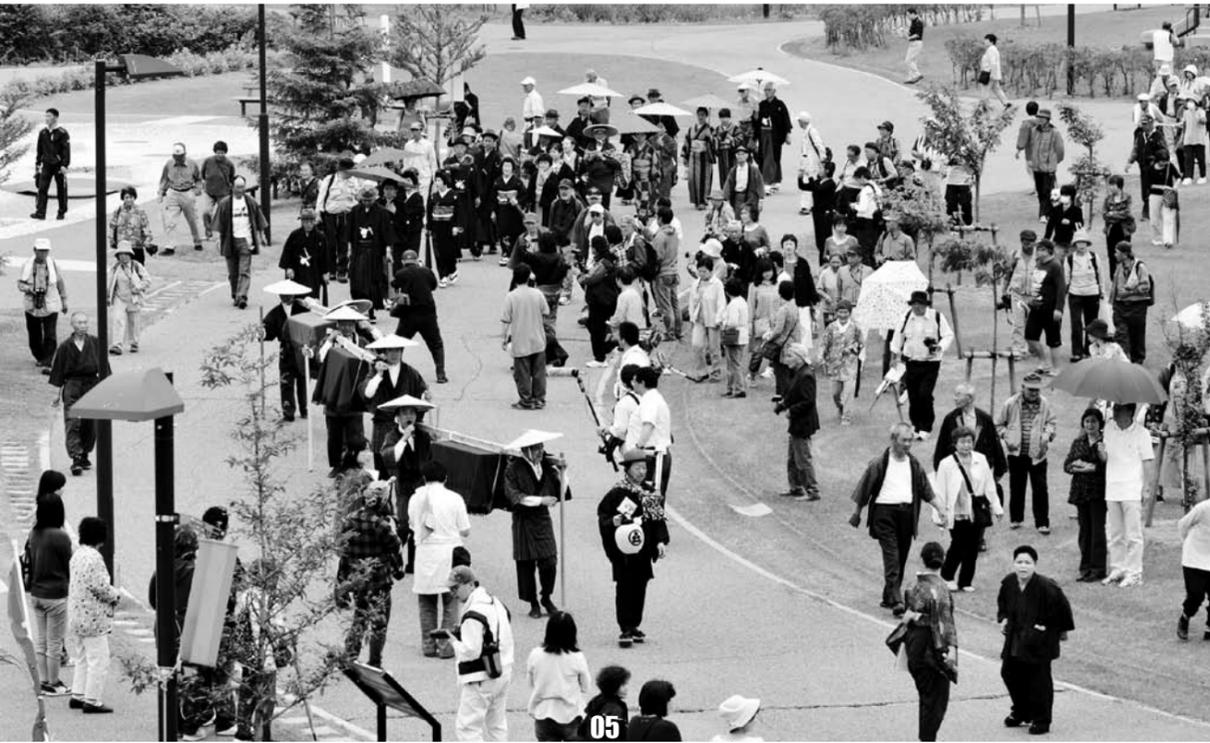
双葉町で花づくりを仕事にしていた私たちは、リステルに移ってから、運動がてらハーブ園の仕事を手伝い始めた。ハーブ園の皆さんと一緒に作業をする人たちと話しながら体を動かすことで、落ち込んでいた気持ちを忘れられた。やはり人とのつながりは大事だと感じた。

今後は白河市のアパートで生活する。友人や同じ町内の人たちと一緒にだと、情報も入るし、相談もできるので心強く思う。

生活が落ち着き、時間ができたら、自分たちが世話をした花の様子を見に、ここを訪れたい。

そして何より、お世話になったハーブ園の皆さんとの再会が一番の楽しみだ。

いつかまたこの場所を訪れたい



【きずな】絆

おシンの嫁入りは、今に忘れていたものを蘇らせる祭り。主役は花嫁や花婿かもしれないが、仲人、料理人や長持ちなど、たくさんの人たちがそれを支えている姿は、地域コミュニティの原点だ。

それが、昨年一度はなくなつた。そして、震災後に復活した。希薄になつた地域との絆が、震災を機に復活する…。このイベント自体が、現代の地域コミュニティを映し出す鏡であるように思える。

人は何もかもを失くした時に、初めて一番大切なものが見えるのかもしれない。

復興、復興と急ぎ過ぎると、災害から立ち直れていない被災者を置き去りにすることになる。

復興への社会的機運が高まれば高まるほど、被災者は、人知れず孤立してゆく。優先すべきは一人一人の心の復興だ。消えかかつたろうそくに、そつと添えられる手のように、さりげなくでもずつとそこにあるという支援が必要だ。

人と人との絆は、しばしば見えない糸に例えられる。絆を作るといふことは、お互いが糸の半分ずつを持って歩みより、それを結んだり、紡いだりすることなのかもしれない。

1本1本の糸は弱いかもしれないが、世代のつながりという縦糸や地域のつながりという横糸が重なり合えば、ものすごく強く、切っても切れない頑丈な絆ができる。

災害というマイナスに一本の縦糸を足せばプラスにできる。まずはゆつくりと1本の糸をつなげることから始めよう。

心の復興のスピードは、人それぞれだ。大切なのは、お互いを思いやる気持ちで、糸を通してきちんと伝わること。

悲しみを分かち合い、励まし合い、助け合える絆を作り、それを胸に、共に歩んでいこう。



- 01_ 行列開始前、裏方さんは出演者の着付けと化粧に大忙し。裏方さんの働きなくしてこのイベントは成立しない
- 02_ 今回の振る舞いは、観客にも参加してもらうため、会場の外で実施された。写真は千本きねで餅をつく出演者
- 03_ 花嫁方、花婿方それぞれの宰領が口上を述べ、荷を引き継ぐ「受け取り渡し」は行列の見どころの一つ。無事に荷が引き渡されると、観客からは拍手が送られた
- 04_ 温泉祭りのちびっこみこし。中ノ沢温泉街に子どもたちの元気な声が響く
- 05_ 2年ぶりの行列を一目見ようと、亀ヶ城公園周辺には多くの観客が訪れた
- 06_ 第1回の開催から着付けを担当している鈴木とみ子さん。「長く続けるためには、裏方も世代交代が必要、今回を最後に後進に道を譲りたい」と話した。
- 07_ 花嫁と花婿が千本きねでついた餅やお菓子を振る舞う
- 08_ 17歳の花嫁、後藤さんの初々しさは女性に大人気だった